



武田泰淳全集

第十二卷

筑摩書房

武田泰淳全集 第十二卷
昭和四十七年一月二十日 第一刷発行

著者 武田泰淳

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話東京(五七)七六五一(代表)

振替東京 四一 二二三

郵便番号 一〇一 一九一

印刷 株式会社 三松堂
製本 和田製本工業株式会社

(分類) 0395 (製品) 72412 (出版社) 4604

武田泰淳全集

第十二卷

第十二卷 目 次

| | |
|----------------|----|
| 中国の作家たち…………… | 3 |
| 老舎の近作について…………… | 9 |
| 中国文学の命運…………… | 12 |
| 中国文学の路…………… | 17 |
| 美しさとはげしさ…………… | 19 |
| 杜甫の酒…………… | 25 |
| 淫女と豪傑…………… | 29 |
| 人間臭と人間ばなれ…………… | 37 |
| 谷崎氏の女性…………… | 44 |
| 作家と人物…………… | 47 |
| 丁 玲…………… | 50 |

| | |
|--------------|-----|
| 谷崎潤一郎の「細雪」 | 51 |
| 『経書の成立』と現実感覚 | 55 |
| 渺茫たるユ氏 | 62 |
| 根 本 | 66 |
| 異国放浪 | 67 |
| 「白乾児」欄に | 71 |
| 『才子佳人』後記 | 72 |
| 作家の狼疾 | 73 |
| 谷崎潤一郎論 | 79 |
| 滅亡について | 90 |
| 中国文学と人間学 | 97 |
| 無感覚なボタン | 105 |
| 女について | 110 |
| 私を求めて | 114 |

| | | |
|---------------|---|-----|
| ア | レ | 116 |
| 『あっは』と『はあ』 | | 117 |
| 賭の姿勢 | | 121 |
| 無言の批評 | | 125 |
| 某月某日 | | 127 |
| 勸善懲惡について | | 128 |
| 私 | | 136 |
| 手塚富雄著『帰り行くひと』 | | 137 |
| 岡本かの子『生々流転』 | | 137 |
| 獣の徽章 | | 141 |
| 貴重なめまい | | 144 |
| 椎名麟三「病院裏の人々」 | | 144 |
| 俠客と佳人 | | 146 |
| 宇宙的なるもの | | 147 |

| | |
|---------------|-----|
| 日 記 | 153 |
| 檀 一 雄 | 154 |
| 中国の小説と日本の小説 | 156 |
| 加藤周一「文学とは何か」 | 162 |
| 三島由紀夫「青の時代」 | 164 |
| 小説家とは何か | 167 |
| 『女の部屋』後記 | 172 |
| 『未来の淫女』自作ノート | 174 |
| しびれた触手 | 177 |
| 椎名麟三「赤い孤独者」 | 181 |
| 作家と作品 | 183 |
| 職場のささやき | 190 |
| 井伏鱒二論 | 199 |
| カミュ『カリギュラ』の成立 | 206 |

| | |
|-------------|-----|
| 作家と手品師 | 209 |
| 新しき知的士族について | 211 |
| 文章政治学 | 220 |
| 竹内好『魯迅』解説 | 226 |
| 酒田の本間家 | 228 |
| ささやかな感想 | 243 |
| 乗りもの礼賛 | 248 |
| 文学の国際性 | 249 |
| 『風媒花』について | 251 |
| 「風媒花」の筆者として | 252 |
| 「新文学全集」あとがき | 254 |
| 望郷 | 255 |
| 『孔乙己』感想 | 257 |
| 作家の立場から | 257 |

| | |
|---------------------|-----|
| ラジオの魔性…………… | 260 |
| わが読書…………… | 268 |
| 奮闘の精神…………… | 269 |
| 大岡昇平『野火』…………… | 271 |
| 玩物喪志の志…………… | 275 |
| ミス未来と密通する男…………… | 279 |
| 「井伏鱒二作品集」第一巻解説…………… | 282 |
| 真理先生…………… | 289 |
| 竹内好訳『魯迅作品集』…………… | 290 |
| 毛沢東の文章…………… | 290 |
| 「亀井勝一郎集」解説…………… | 292 |
| 日本を知らない日本人…………… | 296 |
| 私小説と社会小説…………… | 298 |
| 『愛と誓い』あとがき…………… | 299 |

| | |
|--|-----|
| 実名小説というもの…………… | 301 |
| 女を描ききれない…………… | 303 |
| 新興宗教について…………… | 304 |
| 魯迅とロマンティズム…………… | 305 |
| 坊さんらしい人…………… | 314 |
| 歴史小説の功罪…………… | 315 |
| 羽田空港…………… | 316 |
| 宗教と文学…………… | 318 |
| 岡本かの子『女体開願』…………… | 320 |
| 進水式…………… | 323 |
| 唐代伝奇小説の技術…………… | 325 |
| 知的武士のお母さん…………… | 328 |
| さまざまに発展すべき日本の小説の 今後の方向の二、三について…………… | 330 |

| | |
|-------------------|-----|
| 三島由紀夫『盗賊』解説 | 345 |
| 『人間・文学・歴史』あとがき | 347 |
| 小説案内(三島由紀夫・中野重治) | 349 |
| チャールズ・モーガン『脱出路』 | 352 |
| 飛行機のはなし | 354 |
| 小説案内(梅崎・川端・今ほか) | 356 |
| 未来は既に始まった | 359 |
| 小説案内(曾野・小島・中山・西野) | 363 |
| 『むらぎも』論 | 366 |
| 「時間」の魔術 | 374 |
| 私の創作体験 | 377 |
| 小説案内(佐藤・小沼・女流作家) | 391 |
| 中野重治著「むらぎも」 | 394 |
| 証言と小説 | 395 |

| | |
|-----------------|-----|
| 椎名麟三著『自由の彼方で』 | 398 |
| 私の文章観 | 399 |
| 小説の喜劇・悲劇 | 403 |
| 批評家と作家 | 405 |
| 病者のモラル | 408 |
| 新気運の胎動 | 411 |
| 宋慶齡と宋美齡 | 415 |
| ヘミングウェイ『武器よさらば』 | 429 |
| 賈宝玉とピエール | 439 |
| 解 説 | 445 |
| 粟津則雄 | |
| 解 題 | 455 |

評

論

2



日比谷公園にて 高見順氏と 昭和二十五年頃

中国の作家たち

今から十五年前、民国二十一年の夏、女作家丁玲は友人に向い、次のようにのべたことがあった。

「わたし本当に筆を時々折りたくなるの。思想は低調になる、感情はだらしなくなる。生活ときたら、生活する自分で疑わしくなるくらいだし。どんな暮しをしたら一番良いか、わかるような気はするんだけど、根がこういう人間だからね。どうしても底に感傷気分の癖が抜けなくてさ。仕事では決して怠けていないつもりだけど、しっかり続けて行くには、何かやっばり欠けてるのね。わたしの故郷の河岸の鍛冶屋が、刀をきたえるにはかならず鋼コウをつけて切れるようにするのよ。わたしみたいな人間、まず鋼をつけること考えなくちゃね」。

丁玲は当時すでに雑誌「北斗」を発行する一流作家であった。それがこのような悩みを告白した。自分には何か欠けている、鋼をつけることを考えなければならぬと苦しんでいるのである。彼女はその後、紡織工場や煙草工場やゴム靴工場へ入り、労働生活もした。大学生相手に講演も

した。夫が捕縛され処刑されてからは、生れたばかりの赤ん坊をかかえ、苦しい寡婦ぐらしもした。自分自身も捕えられ、死をつたえられたこともある。戦争がはじまると延安に走った。今度は都会の労働者でなく、陝西省の農村で、農民を相手に泥にまみれた日を送った。そしていつのまにか、鋼が身についたのである。最近上海で発行された「霞村にいた頃」という短篇集には、彼女の進歩がよくあらわれている。

これはひとり丁玲にかぎらない。八年間の苦しい戦争は、中国の作家たちを進歩させた。家を焼かれ、故郷をはなれ、家族を失い、東奔西走するうちに、よく切れる刀に打ちきたえられた。作家ばかりでなく、その対象をなす人民そのものが戦争という鍛冶屋によって鋼がつけられたのである。進歩したというのは、別段、荒々しくなることではない。政治的にはげしくなることでもない。人間を深く考える力ができたことである。たとえば「霞村にいた頃」の登場人物は、一人々々、みな現代の問題を背負っている。知識もない農村の男女のうちに、なかなか大きな問題が発見されていて、読者の心を打つ。

丁玲は身体を休めるため、仕事をまとめかたがた山西省霞村へ行った。この土地は一時日本軍に占領されていた。林の中の教会は美しいが、洞窟を家とする山沿いの淋しい

村である。この村で丁玲は村民の噂のまとなつてゐる若い女に会う。この女は日本軍にさらわれ、隊について生活し、また再びこの村へ逃げ帰ってきたところである。日本語もわかり、おまけに病気をうつされてゐる。村の女たち年寄たちは彼女を軽蔑し、相手にしない。しかし彼女は中国側の軍隊と連絡し、日本軍に関する情報を数回もたらしている。村の活動份子ぶんしは彼女に同情している。だがいずれにせよ、この女は「強姦されて生きてゐる女」である。村の女たちの目からは、恥知らずにちがいない。彼女の親たち、彼女の恋人、彼女の友人は、この彼女をどうとりあつかつたら良いか。そして彼女自身、今後どんな生き方をすればよいのか。これは女として真剣な問題である。決して猟奇的な特殊な話題ではない。占領された地区で常に発生することである。強姦という事件はいやらしいが、女として何とか正面から解決しなければならぬ。これを丁玲はとりあげた。

強姦事件を如何にとりあつべきか、新進評論家馮雪峰も熱心に論じてゐる。強姦の情景をこまかに描写する色情小説は醜い。敵は憎むべきであるが、毒々しい暴露では作品にならない。強姦された後に自ら死んだ烈婦はもちろん感嘆すべきだ。しかし強姦という事実には、更に複雑な場合がある。女にとって、強姦されたと疑われただけ

でも、もうとりかえしのつかぬほど、これは重要な試煉である。敵に強姦された女が如何に生くべきか、新しい解決がなければならぬというのが、馮雪峰の意見であつた。丁玲は霞村で、この新しい解決を迫られた女と語り、女らしい友情のうちに、静かにこの人物を紹介し、おもむろにこの問題をときほぐしたのである。

この短篇集の作品は、年上のわからずやの女房を持つ農民代表のなやみ、新聞記者の案内役にされた兵士のなやみなど、いずれも共産地区の日常生活で当面する、ぬきさしならぬ事実をとりあつかつていて、ごまかしのできぬ丁玲の誠実が各篇に満ちてゐる。浅ましい報告文字は一篇もない。

戦争という事実は、強姦ばかりではない、暗い、おそろしい行為をたくさん見せてくれた。敵側のみではなく、中国人自身の社会にもそれが見られた。いわゆる「漢奸」である。表面化した漢奸はもちろん、その他知られざる漢奸が戦時中もウヨウヨしていた。この暗い面、困った現象を追求したのは、何といつても矛盾である。

かつて「烟雲集」という作品集に載せられた「手」という短篇で、抗戦のために民衆を組織しようとする青年が、町の顔役、勢力者からかえつて圧迫されるところを彼は書いた。これは中日戦争勃発前の事柄だが、いざ戦争が開始